

千萬言

黒田清輝氏の裸体畫談

酔 棋

▲今度が三度目で、是迄の難關は何うにか斯うにか切抜けたが、今度はとう／＼幕を張られました、僕は今更其筋へ向つて時代後れの不平は溢さぬが、これを學術上から繰返し見るの必要を感じる

▲元來裸体畫は繪畫に取り最も高尚に屬するものであるが、世の分らず屋には未だに解釋が出来なくて困る

▲早い話しが純潔で高尚優美なもの之を神仙に求めねばならぬ、即ち人目に觸れぬ無形な空なものを形に現はすには神である底で其神体を描出するには人間界の完全無欠なる人体に據るより外はない

▲されば歐洲の美術家で高尚を以て技術上の極美とするものは皆無形より有形を映出するを眼目とするが、草木や獸類では神聖なる物体を代表する譯にも行かず、化物は人間と動物とによりて形造られ、鬼が角を生やすに極まり居るを見ても分る

▲神聖侵かすべからざるものは神で、此神の眞髓を現はすは、人間を摸するより外はない、人間を摸するにナゼ裸体でなければならぬかと云ふに、衣服を着けては神にならぬ、衣服を着けると時代が現はれ又國体が分る、時代が現はれ國体が分つては之を世界の神と尊信するが出來ぬ、故に時代や國体の分らぬものを無形にして神聖とする次第である

▲で、假令人体を蔽ふとするも、僅かに中片を纏はしめ、其褻の際より人体を窺ふに妨げぬ注意をする、中片を纏

はしむるのは畫面の上に於て着色と調子を取るの必要より迫られる譯である

▲今度幕を張られたコラン氏は僕が七年間も就いた先生で、年は五十前後だが、巴里の博覽會などでは必ず審査官となる人だ

▲其畫は佛國政府の注文によりオデオンてふ芝居の天井に掲げられた下繪で、圖は技藝の舊時代去つて新時代の曙光を放つ意匠に成り、新時代の女神が名譽の花を左手に掲げ、其下に男性が後向になつて幕を明けて居るのであるが、女神の方は兎に角此男性の臀部に迄幕を張るとはチト注意が行届き過ぎたやうだ

▲僕のヤラレタ繪は、實は昨年巴里で此コラン先生に見て貰ひ、先生にナゼ之を博覽會へ出さなかつたかと言はれた位で、自から言ふは嗚呼箇間敷が、最も困難で最も巧拙の分る、所の腰部の關節に力を用いた積りであるが其肝腎な所へ幕を張られた譯だ

▲繪畫も詩歌文章と同じで、有形以外の想像より來つたものを現はすに價値があるので有のまゝ、を寫實するに於ては此程沒趣味なものはない

▲而かも滔々たる世上の畫工が茲に志ぎ、ぬのは哀



黒田清輝《裸体婦人像》
静嘉堂文庫美術館蔵



ラファエル・コラン
《オデオン座天井画のための下絵》
鹿児島市立美術館蔵

れむべきである、型許りなら模様に過ぎぬが、繪畫は考ひを形に現はすもの形より想像されたものである

▲或は人間の形を藉りたのでは神でない、神でなければ高尚でないと唱ふる俗人もおる。これは上面を見た淺薄な説で、殆んど神前に於ける御幣を以て紙切と稱し、神靈に供さる、鏡を以て金に過ぎずと云ふに均し此に至いつてはモー優美とか高尚とかの問題ではない

『報知新聞』明治三十四年十一月二十五日

明治三十四年一月一日から二月三日まで開催された白馬会第六回展で、警察の介入により裸体画の下半身が布で覆われた、いわゆる腰巻事件に向けての黒田のコメントである。文中に登場するラファエル・コランのオデオン座天井画下絵は、黒田清輝の所蔵品であった。また「僕のヤラレタ絵」とは現在、静嘉堂文庫美術館が所蔵する《裸体婦人像》を指す。同作品は師コランに「ナゼ之を博覧会（一九〇〇年パリ万国博覧会）へ出さなかつたか」と言われたとあるが、黒田が同博覧会に出品した《智・感・情》に対してコランは「黒田は日本へ帰つてまづくなつた」ともらしたという逸話（石井柏亭『日本絵画三代志』創元社昭和十七年七月）とあわせて興味深い。